セブンスドラゴン2020

しゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セブンスドラゴン２０２０

【Ｎコード】
Ｎ６８４０Ｙ

【作者名】
しゅん

【あらすじ】
暇つぶしに最適な作品です！

電波塔からの最後の風景

殺人現場でも目撃してしまったのだろうか。

望遠鏡から、少し広いおでこを離し、彼女が俺に振り返った。

ここに来たときに比べその表情は暗く沈んでいる。

「どうしたの？」

聞くが彼女は答えない。

「大丈夫？」

聞くが彼女は答えない。

「何が見えたの？」

聞くと彼女は、小さな手で俺の腕を鷲づかみ、望遠鏡の前に立たせた。

俺は彼女に代わって、膝を少しだけ曲げ、望遠鏡を覗きこんだ。

真っ暗だった。

交代と同時に、時間切れになってしまったようだ。

展望台では双眼鏡を借りることもできたが、彼女の希望により、有料の望遠鏡で東京の風景を見ることにしたのだ。

俺も異論は無かった。
遥々東京に来たのだから、いちいち値段のことなど考えたくなかったからだ。
とは思ったものの、これ程時間が短いとは予想外だった。
双眼鏡の方がよかったかもしれない。
「ちょっと待って。」
彼女に言い、尻ポケットに入れた財布から百円玉を取り出した。
「何が見えたの？」
と硬貨を投入する前に、再度聞いてみるが、返答はなかった。
「…。」
彼女は何も言わず、早く見てと目で訴えてきた。
本当に、殺人現場でも目撃してしまったのだろうか。
だったら急がねばなるまい。
俺は望遠鏡の角度を変えることなく硬貨を入れた。
金属が流れる乾いた音と共に、視界が明るくなり、俺の目に巨大な翼が映った。

そして展望台が揺れ、俺達はその場に倒れるのだった。

ドラゴン襲来

東京が影に覆われた。

都市の上空が翼の生えた生命体ー後に『ドラゴン』と正式に命名されるーによって埋め尽くされた。

レーダーに補足されず、どこから出現したのかも不明。

警察、自衛隊、政治家は、突如出現したドラゴン達にどう対処すればいいかもわからず、一般人に紛れただ呆然と見ていたのだった。

超高層ビルが乱立する都市を見下ろし、一匹のドラゴンが飛んでいく。

ドラゴンは遥か前方にそびえ立ち、都心に巨大な影を落とす『塔』を目指していた。

滑空するように一直線に進み、やがて足が届く距離となると、翼を垂直に広げ減速し、塔の回りをグルグルと周り始めた。

飛び回りながら鋭い眼光を塔へと向け、鉄骨作りの表面を吟味する。

赤い鉄骨によって組み立てられたその塔は都内の超短波を送受信する設備を収容する電波塔であった。

東京タワー。

高さ三百三十三メートル。

たった一人の設計士によって図案は書かれ、建造は命綱一つに身をつつみ、狭い足場とビル風に翻弄されながら生身の男達に建てられたものだ。

建設期間は延長し、鉄骨部品が足りなくなった際には戦車を溶かして金属を集めたという。

先人達の偉業であり、技術の結晶ともいえる建造物である。

ドラゴンは後ろ足で鉄骨をつかみ、翼を下ろし重心を前に倒すことで塔へと着地した。

塔は垂直なので着地というよりしがみついているという方が正しいかもしれない。

翼を折りたたみ、しがみつくその姿は、東京タワーに巨大なコブができたようであった。

ドラゴンは空を見上げ、金色に輝く粉を吐き出し始めた。

ドラゴンの口からは噴水のように粉が吹き出し続け、太陽に照らされたそれらの粉は、東京タワーを中心に東京全域へと、円を描くよ

うに均等に広がっていくのだった。

旋回を続けていた他のドラゴン達は、翼で空気を叩き落とし、それは風として地上を駆け巡った。

歩道から立体高速、山手線の上から、東京メトロの地下鉄、さらに歌舞伎町の裏路地という裏路地の隅々まで風は吹いた。

するとどうだろう。

宙に漂っていた金の粉は風に乗り、地上へと流れたのだ。

それから数分後、粉塵は肥大しやがて開花し、毒々しい色の花を咲かせるのだった。

後にそれらの花々は、滅びを呼ぶ花『フロワロ』と名称される。

そして、フロワロの開花から、数時間後、ドラゴン達による本格的な『侵略』が開始され、国家を守るべく自衛隊による『防衛戦』が展開されるのであった。

Ｎｏ１　新宿駅にて（前書き）

ドラゴン襲来から数十年後、東京にて。

Ｎｏ１　新宿駅にて

東京都庁より中央通りを東に進むと新宿駅である。

新宿駅とは言うものの、駅の面積は私鉄の駅とは比較できないほど広く、そして複数の路線が走るため構造は複雑なのだ。

初めて新宿駅に訪れると、乗りたい路線がわからず迷子になってしまうほどである。

『新宿駅にて』とは言ったものの、一言で伝えてもわからないのが普通だ。

厳密な場所は、新宿駅のバスターミナルである。

曲がりくねったバス停留所と、それを囲むガードレール、そしてところかしこに見られる、新宿駅地下へと続く階段。

ドラゴンや怪物達による攻撃を受けたものの、ここにはバスターミナルらしい面影が残っていた。

そして数分前まで、このバスターミナルで銃声が鳴り響いていた。

突撃銃を構えた十人が扇状に広がり、一匹のドラゴンを取り囲んでいた。

『ビッグカメラ！』と看板のたつビルが背後にあるため、怪物には

逃げ場が無く、ジリジリと押し寄せる銃弾の壁に追い詰められていく。

客観的に見れば、陣形を組む戦闘員達が優勢であるようにも見えるが。

だがドラゴンには慌てる様子がない。

むしろ楽しげに尾をパタパタと振っている。

青い鱗に覆われた胴体と、首から尾までが蛇のように細長い。

背中に生えた翼が空を叩き、地面スレスレに浮かぶそのドラゴンは、『ケミカルドラゴ』と名称される小型のドラゴンであった。

どういう習性があるのか不明だが、全てのケミカルドラゴは玉乗りをするように、巨大な椰子の実のような物体にしがみついているのが特徴だった。

ケミカルドラゴは長い首を持ち上げ、陣形を組む戦闘員達を見回した。

なりやまない銃声と閃光に怯むことなく、最新装備に身を包んだジエータ隊員一人一人を吟味しているかのようだ。

「陣形を緩めて距離を取れ！」

扇の中央に立っていた男が左右へと指示を出す。

ケミカルドラゴは長い首が持ち上げ、一度後ろに頭を引くた。
そして勢いとともに前へと突きだし、次の瞬間、緑色のヘドロを吐き出した。
まるで人間がツバを遠くへ飛ばすような仕草である。
優勢に見えたはずが、ケミカルドラゴが吐き出した毒が陣形を崩し、隊員達の最新鋭の装備を破壊した。
「カバー！」
かけ声と共に、重傷者を囲む隊員達。
「大丈夫か！？」
「しっかりしろ！」
毒に侵された仲間を引きずり、それを背にした一人が再び突撃銃を構えた。
「作戦中止だ！お前達は撤収しろ！」
弾倉を入れ替え、引き金の横に備えられたレバーを下げると、迫ってくる敵の頭部に標準を合わせた。
「隊長！？」
傷の深さが違うだけで、負傷したのは全員同じだった。

皆が毒に侵され、治療が遅れれば危険な状態なのだ。
それでも誰かが敵を引き止めなければ、全員が命を落としてしまう。
「早く行け！」
ぐらつく足腰に渇を入れ、隊長と呼ばれた男は引き金を引いた。
パァン、パァン
と、長い銃身の先から一発ずつ弾が放たれる。
集団包囲よりも正確な狙いが、ドラゴンを怯ませた。
ビクンと首を持ち上げ、翼を広げ距離をとるように飛んでいく。
「行け！今しかない！！」
隊長は振り返らずに叫び、逃げるドラゴンを追おうとした。
ケミカルドラゴはしがみついていた木の実を捨て、大きく羽ばたいた。
ゴーグルに粉塵がぶつかるが、怯まずに威嚇射撃を続ける。
ドラゴンは宙をグネグネとうねるように飛び回ったかと思うと、次の瞬間、隊長へと一直線に飛んできたのだ。

よけようとするが間に合わず、ドラゴンの頭突きに身体が吹っ飛ばされる。

「…！」

鉄骨のガードレールへ衝突し、意識が一瞬とんだ。

だが顔を上げるとドラゴンが再び飛んできた。

休む間もなく、地面を転げそれを回避する。

起き上がると同時に、迎え撃とうとするが、突撃銃は今の一撃で手元を離れてしまっていた。

しまった、と思う間もなくドラゴンの牙が向かってくる。

慌ててベルトを触ると固い感触が。

そして手から伝わる形から、その正体が解った。

「グァァァァァァァ！！」

望みと共に、迫る真っ赤な口へそれを投げつけた。

強力な爆風と共に、金属の塊が弾け飛ぶ。

…はずだった。

「！」

地面に接した自分の視界に無骨な塊が転がった。

投げられた手榴弾は炸裂することなく、元の形のまま地面に落ちた。

「…。」

最後の抵抗も虚しく終わった。

「ハハ…ハ。」

自分の不甲斐なさに出てくるのは笑みだけであった。

まさか、安全ピンを抜き忘れるとは。

あきらめかけたその時、ブゥン、と耳元で何かが飛んでいった。

そしてケミカルドラゴが悲鳴を上げた。

翼が止まり、ズズゥンと粉塵を巻き上げ、地面に腹をついたのだ。

倒れたドラゴンは狂ったように頭を振り回していた。

その頭には二つの意味で見慣れない物が突き刺さっていた。

自分が指揮する部隊の人間が所有していないことと、武器としては時代遅れであるということ。

突き刺さっていたのは一本の短刀であった。

誰が投げたのか。

振り返る間もなく、地響きと共に自分の脇を走っていく一人の背中。

やはりそれは部下ではない。

服装も武装もまるで違い、まったく見慣れない姿であったからだ。

誰なのかはわからなかったが、その背丈と肉体から男であるということだけはわかった。

再び飛行しようと体位を立て直したケミカルドラゴ、そして走る背中は一直線にそれへと走る。

ドスン、ドスンとブーツの音を響かせ、ニメートル近い巨体が走る。

頭を下げ、肩を盾に風を切る巨体。

地面を蹴り、全ての加速と重量をドラゴンへと叩きつけた。

破壊鉄球のような一撃に、ドラゴンは悲鳴も上げずに吹っ飛び、新宿駅の地下道への壁を突き破った。

「嘘だろ…？」

体当たりをかました人物は素手ではなかったろうか。

陣形と銃撃をもってしても苦戦する相手を叩き落とすとは。

地下へ落ち、見えなくなった一人と一頭。

「大丈夫です。すぐに終わらせますから。」

声と共に金属の擦れる音が自分の横を通り過ぎた。

呆気に取られ、未だ倒れている自分の前に、刀を構えた女の背中が立ったのだ。

腰まで伸びた黒炭のように黒い髪と、白いシャツ。

そしてミニスカートにニーソックスというこの場には不似合いな姿であった。

まさか戦うつもりなのだろうか。

刀を構えている時点でそうだろうが…。

彼女は先程の巨体に続き、粉塵の中へ飛び出していった。

No2　二人の精鋭

「新宿駅に出現したケミカルドラゴに対し負傷した模様、直ちにメディカルルームへ移送せよ。」

「現場に残った人数は？」

「第三小隊の隊長、一名のようです。」

「了解。」

負傷者を担架に乗せ、衛生兵がビルへと入っていく。

このビルは東京都庁。

かつては東京都における様々な事務を執り行う役所であった。

現在はドラゴンから東京を奪還するための砦として機能していた。

砦を指揮するのは政府が有事に備えて組織した、『特務機関ムラクモ』である。

「ケミカルドラゴ討伐のため、付近にいたムラクモの戦闘員が増援に向かったらしい。」

手当てを受けていた隊員のもとに報せが届いた。

「人数は？」

「二人だ。」

思わず包帯の巻かれる腕を振り上げそうになった。

特務機関ムラクモの任務は東京の奪還であり、個人の救出ではない。

それを受け持つ部署もあるが、あくまで首都奪還の作戦を基盤にムラクモは機能しているのだ。

生死の定まらない一人のジェータイのため、これ以上増員されることはないだろう。

「安心しろ。特務機関ムラクモでも精鋭の二人組だそうだ。」

肘を曲げ、柄を持った右手を耳の後ろで止める。

左手を刀身のミネに添え、肩の力と腰を落とす。

まるで弓を引くかのような姿勢だが、構えているのは刀である。

眼下には地下へと続く階段。

本来なら、地上に面した部分は屋根と壁に覆われているが、それは一分前に相棒が壊してしまった。

階段の奥は粉塵と暗闇に隠れ何も見えず、ただ二つの巨体が蠢いているのが直感できた。

ドラゴンの咆哮と、拳のぶつかる音、そしてむき出しのコンクリートの臭い。

相棒は戦い続けている。

「デスさん、大丈夫!?」

下へ向かって叫んでからしばらくすると、蠢いていた一人が地上へと顔を出した。

男は彼女よりも五段下の段に足をのせているが、彼女の目線は相棒のサングラスにピタリと合った。

「大丈夫だ、敵も弱らせた。止めは任せたぞ。」

ギターの低音が唸るような声で相棒は返事をし、彼女と同じ段差へ立ち拳を構えた。

不似合いな二人が並んだ。

三十センチは違うだろうか。

銃撃と、体当たりの一撃に加え、地下での拳による一騎打ちを受けたのだ。

ケミカルドラゴは弱っていた。
ここで刀による一撃は決定打となるだろう。
それを悟っているのか、ドラゴンはなかなか地上へと顔を出さない。

「…。」
「…。」
「グルル…。」
「…。」
「！」

粉塵の中から飛び出したのは毒のヘドロだった。

「デスさん！」
刀を構えた彼女を庇うように、相棒はそれを背中で受け止めた。
「ちっ！」
「デスさん！」
「グルルルルルァァ！！」

「俺にかまうな！止めをさせ！」

膝をつく相棒を尻目に、女は腰を少し引いた。

胸を張り、肩胛骨をくっつけるかのこどく刀を持った腕を引く。

咆哮と共に、ケミカルドラゴが粉塵からぬうっと顔だけを現した。

ゴツゴツした青い顔には、赤い液体が滝のように流れている。

ドラゴンの頭部には脇差しによる傷が残っていた。

女は上半身を半回転させ、右手で支えていた刀を傷痕へ向け貫いた。

両端が壁に包まれた階段では、断末魔の叫びが永遠と反響していたのだった。

Ｎｏ３　特務機関ムラクモ

午後二時だが、時刻を問わず東京は薄暗い雲に覆われていた。

ドラゴン襲来のその日から、一度も青空が東京上空に広がることはなかった。

陽の光もほとんど届かなくなり、本来少なかった東京中の自然は枯れ果てていた。

灰色の空とは対照的に、地上には極色の花が咲き乱れている。

その花、フロワロである。

コンクリートの地中に根を張りめぐらせ大繁殖をするフロワロ。

ドラゴンだけでなく、この外来種によっても東京は侵略されている。

そしてフロワロのまき散らす花粉が、人を毒に侵し、ドラゴンとは別の怪物を生み出す原因でもあった。

フロワロの撲滅と、ドラゴンの討伐。

この二つが首都東京を奪還するための最重要課題であった。

「ハ～イ、ヒーロー！超余裕でドラゴン討伐と救出任務をクリアしたって聞いたぞぉ！」

「余裕…じゃないよ。助けるつもりが助けられちゃったし。」

東京都庁のロビーにて、二人の女がカスタマーサービスのようなカウンター越しに話していた。

ここは都庁内で暮らす一般市民からの依頼が申し込まれる部署であった。

ムラクモに属する戦闘員は各自の任意で、ここで依頼を受ける。

もっとも依頼を受けるのはあくまで、ムラクモからの指令が下りない時だけだが。

「助けたジエータイと一緒にあのデカブツを運んだのか？」

「うん。デスさんは身体が大きいから、私一人じゃ運べなくて。」

女の一人はケミカルドラゴにとどめをさした黒髪の女である。

セーラーシャツとミニスカートにニーソックス、そしてベルトには脇差と日本刀を備えられている。

列記としたムラクモの戦闘員であり、コードネームは『サムライ』

であった。

対する人物はこの部署を管理する、『チェロン』という名の銀髪の女であった。

「あのデカブツでも治療が必要とは意外だよな・・・。」

「そんなこと言わないでよ。デスさんは私を守ってくれたんだよ。」

「だってヒーローの相棒、シュワルツネッガー扮するターミネーターとそっくりだよ？おまけにいつもサングラスだし。」

「・・・それは私も時々思うけど。」

等と二人が話していると、遠くからブーツの音が響いてきた。

見ると二メートル近い巨体の男が廊下の真ん中を悠々と歩いている。

噂をされていたご本人、「デスさん」である。

ここでターミネーターのＢＧＭを流せば、映画のワンシーンとそっくり重なるだろう。

廊下をすれ違う一般市民全員が彼へと振り返っているほどだ。

サムライが「デスさん」と呼ぶが、その男の本来のコードネームは『デストロイヤー』である。

ケミカルドラゴとの戦闘で見た通り、素手で怪物と戦う、近接戦闘のエキスパートであった。

「おおぉ。噂をすれば・・・。もう治療が済んだのか？」

「デスさん。身体はもう大丈夫・・・？」

何の噂をしていたのか気になったデストロイヤーだったが、「大丈夫だ。」と相棒への返事を優先するのだった。

「ごめんね私が油断しちゃったから。」

「命があったんだ、次から気をつければいい。」

「そう・・・だけど。」

俯くサムライを前に、デストロイヤーは責めることはなく、ただ黙って彼女の頭頂部を見下ろしていた。

そして並ぶ二人を前に、改めてその身長さに息をのむチェロンであった。

「いいコンビだな。まるで兄妹みたいだ。」

「俺が弟で、サムライが姉貴か？」

「バカか、逆だろ。」

「・・・。」

チェロンからの鋭い言葉がデストロイヤーに突き刺さり、彼は黙りこんでしまった。

「デ、デスさん・・・。」

「・・・。」

「ひょっとしてスネてるのか？」

「チェロンさん！デスさんグラスハートなんだから・・・！」

「う、嘘！何でも知っているこの私でも、それは知らなかった。というかつまんないボケかますからいけねえんだろ？」

「デスさんはあれで真剣なの！」

墓石のように静かになったデストロイヤー。

こうなってしまっては、しばらく戻らないだろう。

「と、ところでアンタ達、時間はあるか？」

傷ついたデストロイヤーの心を取り戻すべく、チェロンが真面目な話を始めた。

「早急の依頼が届いている。アンタ達当てじゃないが、時間があるなら引き受けてくれないか。」

「どんな依頼なの？」

「依頼者を『池袋』まで連れて行ってほしいんだそうだ。」

「池袋だと？」

真面目な会話にデストロイヤーが加わり、チェロンは安堵し、サムライは心の中でガッツポーズをとっていた。

「池袋のどこだ？」

「そこまでは聞いていないね。」

東京都庁のある新宿から池袋まで、山手線で数分である。

だが侵略者達が蔓延る東京に公共交通など機能していない。

移動手段は自分達で確保しなければならない。

「連れて行ってほしい理由は何？」

「依頼者に聞きなよ。」

「安全ではないな、池袋は。」

「一般市民かの依頼じゃないから、依頼者も戦力になるつもりだと思うよ。」

依頼の理由は不明だが、どうやら依頼者は池袋まで行く兵力がほしいらしい。

「時間はあるから、とりあえず話だけでも聞きたいな。」

「賛成だ。依頼者はどこだ？」

「アンタ達の後ろ。」

Ｎｏ４　少女からの依頼

立っていたのは少女だった。

薄黄色の長髪をツインテールに縛り、それを紫のリボンでとめている。

黒と紫を基調にしたゴシック人形のような服をまとっており、身体とタイツをはいた両足は針金のように細かった。

そしてなぜか頭の上に、冠がのっている。

「ええと…。」

サムライは見慣れぬ姿に困惑している。

池袋まで依頼者も戦力になると言っていたが。

目の前にいるは、シックではあるが可愛らしい服装に華奢な身体。

武器らしものも持っていない。

持っていたところで、この少女が戦えるだろうか疑問でもあるが。

物言わぬ少女に、デストロイヤーがチェロンに確認するが、依頼者はこの少女で間違いないようであった。

「池袋に何のようだ？」

「…聞いてどうするの。」

巨木のような男の眼光を前に、少女は冷めた眼差しを返した。

「依頼を聞いてくれたのは嬉しいけど、私はあなた達が依頼を受けるか受けないか早く決めてほしいの。」

少女は淡々と自分の気持ちと、事情を言った。

年上であるサムライと、遥か上に見えるサングラスに怯む様子は見られなかった。

怯むどころか礼儀が無い。

「で、でも、私達も依頼内容を詳しく知っておいた方が…。」

「『私を池袋まで連れて行って。』同じこと何度も言わせないで、イライラするから。」

「あなたのこともよく知らないし…。」

「私、深く他人と関わることが嫌いなの。」

「あはは、そうですの…。」

なんとか円満に話そうとするサムライだが、取り付く島は無かった。

「お嬢ちゃん、口のきき方には、」

「お嬢ちゃん呼ばわりしないで。怒るわよ。」

嬉しい、イライラする、嫌い、怒る、といった感情表現を立て続けに並べた少女。

ポジティブな言葉が実に少ない。

そして、少女からのキツい言葉を受けたデストロイヤーだったが心は傷つかなかった。

丸太のような腕を組み、ジッと考え始めている。

「どうするんですの、ヒーロー達、この子の依頼を受ける？」

「どういたしましょう、デスさん？」

「お前ら、お嬢ちゃんの口が移っているぞ。」

「お嬢ちゃんって呼ばないで！」

三人の下から、荒い少女の声が聞こえた。

見ると少女は小さな拳をギュッと握りしめ、猛獣のような顔で三人を見上げていた。

「…子供扱いしないで！」

「ご、ごめんなさい。そんなつもりじゃ…。」

そんな少女を前に、チェロンが二人の耳元で囁いた。

「あの子の依頼は二時間前から出ていたが、あの子を見るなりみんな断っていたんだよ。」

「二時間前だと、緊急の依頼じゃなかったのか？」

「その緊急依頼が二時間前に出て、今にいたるというわけだ。」

「そんな…。」

少女は二人へ背を向け、リボンのついた靴で地面を擦りながら、ロビーへと歩き始めた。

サムライが呼び止めようとするも、少女は振り返らず、イスへと腰掛けるのだった。

どうやら二人を諦め、次の依頼者が見つかるまでそうしているつもりのようだ。

「ありゃりゃ、怒らせちゃったか。」

少女の様子を見ても陽気なチェロンとは対照的に、サムライは暗い表情を浮かべている。

「迷っているのか？」

「どういう事情があるのかわからないけど、このまま放ってもおけないし…。」

「同感だ。」

「デスさんもそう思う？」

「ああ。」

「でも・・・。」

ためらうようなサムライに、デストロイヤーは組んでいた腕を下ろし、彼女の頭へ手をのせた。

「傷はもう完治している。心配するな。」

ゴツゴツしたデストロイヤーの返事にサムライは安堵のため息を漏らし、チェロンが依頼認証の手続きを始めるのだった。

Ｎｏ５　自己紹介

本来、ハッカーとは高度なコンピューター技能や知識を持つ人を指す。

だがその意味は誤用され、ハッカーとは悪意を持ってコンピューターシステムを破壊する人を指す意味となってしまっていた。

２０００年代まで、ハッカーの攻撃はいたずらレベルのものが多かったが、２０１０年代となるとその被害数も質も急速に変わった。

スマートフォン専用のウイルスが作られたことで被害数は増え、とある国のウラン濃縮施設のシステムをハッキング、及び破壊する程度にまで被害の質は成長した。

陸、海、空、宇宙に次ぐ第五の戦場としてサイバー空間が上げられるほどになり、『ハッカー』という肩書きは進化を続けていったのだ。

そして、その肩書きをコードネームに持つのが先を歩く少女であった。

小さな背丈と、その足の長さでせっせと先を行く少女の背中をサムライとデストロイヤーが追いかけているのだった。

正面玄関へと歩くこの三人の姿は、先を歩く妹を追う姉と兄（父親みも見えるが）のように見える。

「依頼を引き受けてくれてありがとう。私はあなた達と違って戦闘は不得意だけど、敵の能力を分析してその脆弱性をつくことに特化しているわ。」」

改めて確認してみたところ、彼女も特務機関ムラクモに所属する戦闘員のようだ。

見慣れない姿だがそれも仕方ない、少女がいつ所属したのかもわからず、百人前後から成る戦闘員の顔全て覚えられるわけなどない。

「コードネームは『ハッカー』。とりあえず依頼が終わるまでよろしく。」

一切振り返ることなくハッカーは挨拶と自己紹介を終えた。

今度はこちらの自己紹介かとサムライが意気込むや否や。

「あなた達…、『サムライ』と『デストロイヤー』ね。」

ハッカーは初対面二人のコードネームを言い当てた。

よく見ると小さな背中に隠れた少女の腕から、青白く透明な光線が垂直に立っているではないか。

小走りで歩きながら、ハッカーはその光へと指をあてる。

「あなた達の戦闘実績はかなり高いわね。依頼を申請してからかなり時間がたったからハズレくじしか残っていないのかと思ったけど

…。」

ハッカーの指にあわせ、顔写真までもが映る光の画面が動いているが、画面を支えるディスプレイは無い。

画面は実態の無い光のようにそこに浮かんでいるだけなのだ。

「余り物にも福があるのね。」

ハッカーが腕を下げると、薄く平らな光の画面は跡形も無く消えるのだった。

「『ハッカー』か、じゃあ『ハッちゃん』だね。」

「…。」

サムライの言葉にハッカーは何も答えない。

自分の能力を説明したはずが、まさか名前に食いつかれるとは思わなかったろう。

「でも呼びづらいな。じゃあ『カーちゃん』かな。これだとお母さんみたいになっちゃうような…。」

歩きながらサムライがおでこに人差し指を当て始めた。

「じゃあ…『ハーちゃん』…かな。」

「おい、やめておけ。」

やめさせようとするが、ハッカーからの口から拒絶は無かった。

「……好きにして。」

変な名づけにハッカーが喜ぶとは思えなかったが、意外にも彼女がそれを否定しなかった。

肯定でもなかったが、いつの間にか先を歩いていたハッカーの背中がサムライ達へと近づいていた。

廊下が終着に近づくと、ハッカーの背中を通りこし、デストロイヤーが正面玄関のドアに手をかけた。

その時、聞きなれた声が二人を呼び止めるのだった。

Ｎｏ６　その男、おバカにつき

「よう。デカブツとお嬢さん。」

見ると黄色いスーツにオールバックヘアーの男が立っていた。

「この野郎。」

とデカブツと呼ばれたデストロイヤーは、ドアから離れ男へと進撃する。

両腕を揺らしながら近づく巨体を臆することなく、ニヤニヤと黄色い男はそのサングラスを見上げている。

何を思ったのか、男は握手するように右手を斜め上に差し出した。

対してデストロイヤーが左手を斜め下に出し、出されたそれをつかんだ。

握手するよう組み合わさった不似合いな二つの手。

しばらくの沈黙の後。

「…痛い。」

黄色男の顔が歪み始めた。

「痛い痛い痛い痛いぃ、ギブギブギブ、ギブアップ！」

ひたすら手を振りほどこうとするが、デストロイヤーは放さない。
「誰がデカブツだ？」
「許してデスちゃん！俺が悪かった！」
「ちゃん」付けで呼ばれることが嬉しいわけがないが、謝っているのでとりあえず男の手を解放するのだった。
「あ、ああ…。全然かなわないぜ…。俺だって鍛えているのによぉ。」
「所詮鍛え方が違う。飛び道具に頼るお前では俺に勝てん。」
「まぁ、さっきのは俺も本気を出さなかったからな。」
「なに？」
先ほどの悲痛な表情はどこへやら、男はケラケラと笑い出した。
笑い声を見上げハッカーは遠慮なくため息を吐き出したのだった。
おバカなこの男も「サムライ」や「デストロイヤー」と同期の特務機関ムラクモに属する戦闘員である。
「トリックスター」
それがこの男のコードネームだった。
見上げつつもバカを見下すような目つきのハッカーに気づき、サム

ライは慌ててその口を封じようとする。

「トリさんは今から外へ行くんですか？」

「な、なぜわかった…！」

まるで知られたくない過去の過ちを解き明かされたかのごとく無駄に劇的に驚き返すこの男を前に、再び腹式呼吸からの全力のため息がハッカーの口から吐き出される。

サムライは苦笑いを浮かべ「姿を見れば分かりますよ。」と返すのだった。

「ハハハ、だよな。一目瞭然だろ。」

トリックスターの背中に巨大な筒がまかれていた。

そして両太股にはホルスターと両肩から腰にまかれたベルトと膨らんだポケット、この男の戦闘時の服装であった。

「俺はデカブツと違ってか弱いからな。お守りがたくさん必要なのさ。」

「どこへ行く予定だ？」

「とりあえず新宿駅から山手線だ。」

山手線という言葉に三人が反応する。

「面白い機械を見つけたんだ。それの点検も兼ねて少し山手線を走ろうかと思ってな。」

侵略を受けたとはいえ東京にも様々な機械が残っている。

侵略を生き延びた人類はそれらの中から使える部品を集め独自で武器や道具を開発することがあった。

どんな機械かと、サムライが聞くと彼はこう答えた。

「もともとは大型トラックのエンジン部分だ。で、その車輪部分を改造して線路を走れるように設計したのさ。線路自体に問題がなけりゃどこまでもいけるだろうが、何せ試作機だからな。点検も兼ねて近場を走ろうと思っていて、まぁ池袋までかなぁって思っていたんだけど、……ってなんだお前ら、近い近い近い、近いって！」

超ご都合のいい話へ、三人の顔が磁力に引き寄せられるかのごとくトリックスターへと迫っていた。

「それを使えば池袋まで早く着けるのか。」

「で、ですけど…。」

「何人乗り？」

「五、六人は乗れるが…。」

「ねえハーちゃん。目的地は池袋駅から近いかな？」

ハッカーは何も答えず、トリックスターの前に立った。

時間の浪費かと思いきや、目の前にいる男は池袋まで最速でたどり着ける手段を持っている。

そして依頼を引き受けてくれた二人はこの男と顔がきくらしい。

渡りに船とはこのことである。

「さっきから気になっていたんだけど…。この子誰？」

ため息を吐き出しそうになるが時間の節約のためにそれを抑えハッカーは言った。

「私を池袋へ連れて行って。」

Ｎｏ７　眠れる獅子

「今何時？」
「昼の二時だ。」
「早すぎるよぉ。」
「早すぎない。」
「ゆうべさぁ、足が冷えちゃって冷えちゃって眠れなくってさぁ…。」
「それはお気の毒にな。」

トリックスターは都庁のエントランス広場（路上）で丸まっていた青年を起こした。

「で、今何時？」
「昼の二時だ。」
「人間が起きる時間じゃねえよぉ。」
「起きる時間だ。さぁ行くぞ。」

肩を貸し、酔っぱらいを担ぐかのように一緒に歩き出す。

「だいたい今何時だ？」
「昼の二時だ。」

寝ぼけて同じ質問を繰り返すこの青年が、トリックスターの相棒である。

青年という表現は正しくないかもしれない。

やせ細った体と、常にお辞儀をしているかのように七十度に曲がった腰、そしてボサボサの白髪を隠すように深くかぶったフード。

不良という表現をすべきだろうか、それともインフルエンザ患者と表現すべきだろうか。

「アハハ、相変わらずだねサイさん。」

「今何時？」

「お昼の二時だよ。」

『サイキッカー』

それがこの青年のコードネームである。

武器を使わず、人知を超えた攻撃手段を持つことからそう名付けられた。

だが日頃の彼の姿からその力を疑問視する者を多い。

というか、どうして路上で寝ていたのか。

ハッカーが相変わらず嫌なものを見るかのようにサイキッカーを見

上げているが、それは彼女の性格によるものではなく、初対面の者のほとんどが彼女と同じようにしたであろう。

「新宿駅まで一緒に行こうと言ったが、コイツは元気ハツラツになるまで戦力外と思った方がいいぜ。」

「だろうな。できるだけ早く起きてくれると頼もしいがな。」

「ほらね、デスさんすらもサイさんのことをすごいと思っているんだよ？」

サムライが不満げな顔を浮かべるハッカーへ言うが、彼女は聞く耳を持たなかった。

ハッカーは何も言わず、リボンのついた革靴の音を響かせながら、さっさと先へ進んでいくのだった。

サイキッカーどころかサムライ達にも興味がないかのようだ。

「ハーちゃん…。」

「急いでいるようだからな。これ以上無駄話はできない。」

「今何…。」

「それは悪かった。コイツはともかく、俺は足を引っ張らないぜ。」

それに四人が続き、一行は中央通りを進み、新宿駅へと向かうのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6840y/

セブンスドラゴン2020

2011年11月22日23時46分発行